

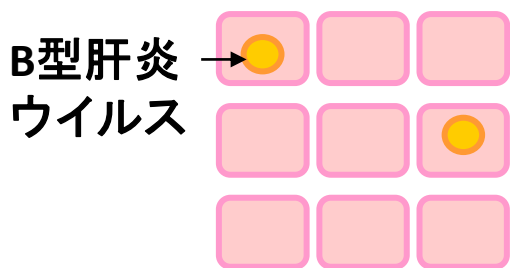
B型肝炎に関する 基礎知識について

B型肝炎ウイルスの主な感染経路について

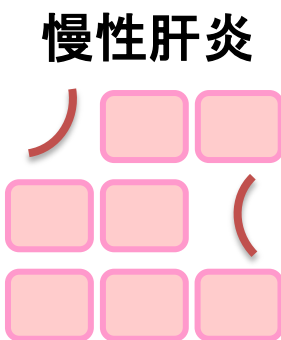
- 肝炎ウイルスが含まれている血液の輸血等を行った場合
- 注射器を肝炎ウイルスに感染している人と共用した場合
- 肝炎ウイルス陽性の血液を傷のある手で触ったり、針刺し事故を起こしたりした場合（特に保健医療従事者は注意が必要です。）
- 肝炎ウイルスに感染している人が使用した器具を、適切な消毒などを行わずにそのまま用いて、入れ墨やピアスの穴あけなどをした場合
- B型肝炎ウイルスに感染している人と性交渉をもった場合
- B型肝炎ウイルスに感染している母親から生まれた子に対して、適切な母子感染予防措置を講じなかった場合
- 集団予防接種の際に注射器の連続使用が行われた場合（注）
 - 注）国は予防接種実施規則により、昭和33年に注射針について、昭和63年に注射筒について、被接種者ごとに取り替えることを定めています。

B型肝炎ウイルスによる肝炎発症について

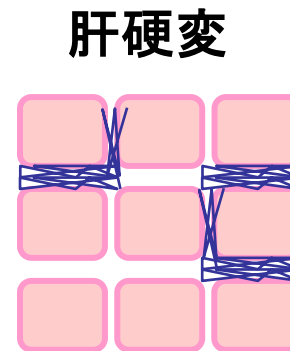
B型肝炎は、B型肝炎ウイルスに感染することによって発症する肝炎（ウイルスを排除しようとする免疫反応により、自らの肝細胞を破壊し、肝臓に炎症を起こした状態）であり、慢性化して長期化すると、肝硬変、肝がんを発症させることがある。^{※1}



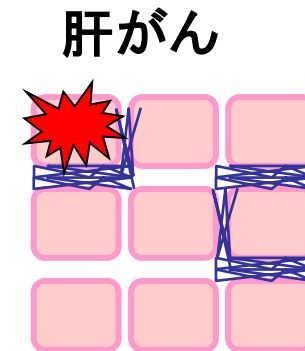
B型肝炎ウイルスが感染している肝細胞を自己の免疫が攻撃する。



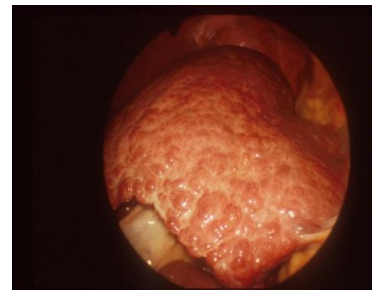
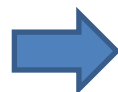
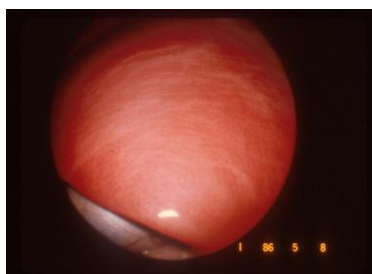
肝細胞が破壊され炎症が生じる。



肝細胞は再生するが、線維が生じ、肝臓は硬くゴツゴツした外見になる。



正常肝細胞ががん細胞に変化する。



発がん

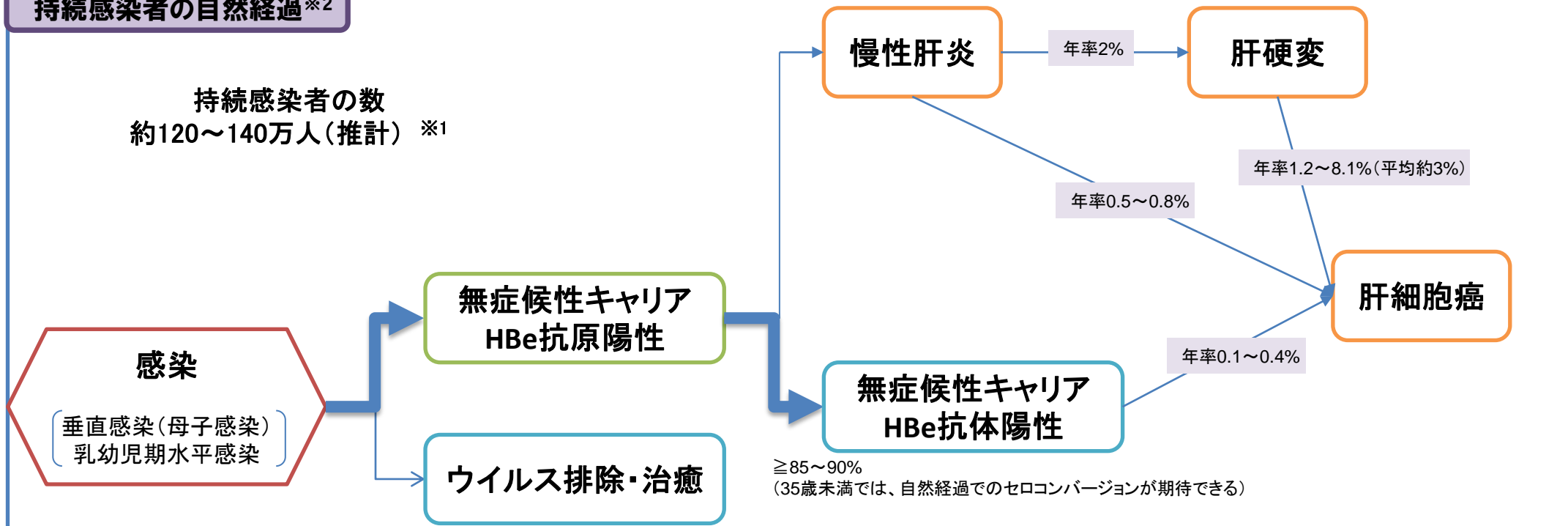
B型肝炎ウイルス持続感染者の自然経過について

基本情報

- 乳幼児は、生体の防御機能が未完成であるため、B型肝炎ウイルスに感染してウイルスが肝細胞に侵入しても免疫機能が働かないため、ウイルスが肝臓にとどまったまま感染状態が持続することがあり、持続感染者となる。^{※1}
- 最も持続感染者になりやすいのは2,3歳ころまで（最年長で6歳ころまで）で、それ以降は、感染しても一過性の経過をたどることが多い。^{※1}
- 一方で、欧米では成人期に感染しても、約2～10%が持続感染者になるといわれており、日本との違いは、最近、その原因は遺伝子型（Genotype）の違いによることが示唆されている。^{※2}
- 日本でも成人期におけるGenotype A（欧米型）の感染が増えてきており、持続感染化が問題とされている。^{※2}

持続感染者の自然経過^{※2}

持続感染者の数
約120～140万人（推計）^{※1}



B型肝炎ウイルスマーカーについて

B型肝炎ウイルスには、HBs抗原、HBc抗原、HBe抗原の3種類の抗原と、これに対応するHBs抗体、HBc抗体、HBe抗体の3種類の抗体があり、これらにDNAポリメラーゼ等を加えて、B型肝炎ウイルスマーカーと呼ぶ※1

HBs抗原陽性※1

・ B型肝炎ウイルスが肝臓に住み着いてB型肝炎ウイルスに感染している状態にあることを示す。

HBs抗体陽性※1

・ かつてB型肝炎ウイルスに感染したことがあり、現在治癒していることを示す。

HBe抗原陽性※1

・ 血中のB型肝炎ウイルス量が多く、感染力の高い状態にあることを示す。

HBe抗体陽性※1

・ 血中のB型肝炎ウイルスが少なくなり、感染力も低くなった状態を示す。

DNAポリメラーゼ※1

・ 陽性であれば、B型肝炎ウイルスが盛んに増殖している状態を示し、HBe抗体陽性の場合でも、ウイルスに感染力があることを意味し、陰性であれば、B型肝炎ウイルスが増殖していない状態にあることを示す。

HBc抗体陽性※1

・ 高値であれば、B型肝炎ウイルスが肝臓に住み着き、B型肝炎ウイルスに感染している状態にあることを示し、低値であれば、かつてB型肝炎ウイルスに感染したことがあることを示す。